

如水会寄附講義「社会実践論」講義要綱（2010年度夏学期）

講義責任者：筒井 泉雄

2010年4月13日（火） オリエンテーション
14時40分 東2号館 2201番教室

如水会寄附講義「社会実践論」では、社会の第一線で活躍されている、本学出身の12名の先輩の方々に、オムニバス形式による講義（火曜4限）をお願いしています。

皆さんが、将来への展望を胸に膨らませ、希望を実現するための学問を涵養する指針となるように、また如何に学ぶかを考える指針となるように、「学生時代に何をしてきたか」、「どのように人生を歩んできたか」など、経験に裏打ちされた職業意識、人生哲学、現代産業の現状など、自らの経験を踏まえた講義を、現在第一線で活躍されている諸先輩をお願いしています。諸先輩の講師の方々は、自身の歩んでこられた経験と、現在の立場から、社会、日本、世界を鮮やかな切り口で切り取り、現代社会や社会実践のありかたを皆さんの前に、簡潔に広げてくださいます。

皆さんは、講義を聞き、諸先輩の方々の生き方やグローバルな考え方に触れ、自身と照らし合わせて考え、質疑応答、感想、意見という形で返し、ともに学ぶ場を作り出すことで、キャリア形成の第一歩を踏み出して下さい。

なお、本講義は、如水会及び一橋大学の学問風土の活性化を目指して、故永井正（22学）氏が寄附された基金をもとに運営されている一橋大学後援会「キャプテンズ・オブ・インダストリーを考える委員会」からの資金提供によって運営されています。

講義日程

第1回 4月20日（火）



テーマ：「一橋の精神と風土」

講師：大澤俊夫 東京商科大学・昭和27（1952）年卒
元 NEC リース株式会社社長

講義内容

一橋大学は、明治8年（1875年）に、私塾商法講習所として、生まれてより135年の歴史を経て、今日の我が国屈指の社会科学の総合大学に発展するまでに至った。しかしその道程は平坦なものではなかった。数回にわたる学園存亡の危機があったが、その都度全学が一致して闘い、克服してきた。しかもその間、常に本学は、我が国の経済社会の近代化の先駆者として、学問と実践の両面にわたって有為な人材を輩出してきた。このような本学の活力を産み出してきたものは何であったのか、その「精神と風土」について語り、併せて、本学の建学の精神を体現する言葉「キャプテンズ・オブ・インダストリー」の現代的意義について言及したい。

第2回 4月27日（火）



テーマ：「3つの人間力と3冊の本」

講師：山本亘苗 経済学部・昭和44（1969）年卒
元 松下電器産業（現パナソニック）株式会社常務役員

講義内容

松下電器（現パナソニック）での39年間、私が目指した3つの「人間力」についてお話をしたい。その源泉は3冊の本である。まず、私は、「不作為」を恥としスピードを旨として、常にビジョンを描き周囲と協働して改革や仕事を進めた。司馬遼太郎「坂の上の雲」は最高の教科書であった。そして、私は、どんな逆境下にあっても、楽観的な精神と感謝の気持ちを忘れず、何とか窮地を乗り越えることができた。宮本輝の「朝の歓び」などの作品に大いに勇気づけられた。また、私は、人生の目的は「はたらく」こと、つまり「傍（はた）を楽しくさせる」ことだと考え、常に「笑い」を供にして人の心に火をつけることを心がけた。D・カーネギー「人を動かす」は、学生の頃からの「私の原典」である。

第3回 5月11日(火)



テーマ：「転機を自分のものにする対応力」

講師：大塚久美子 経済学部・平成3(1991)年卒
株式会社大塚家具 代表取締役社長

講義内容

学生時代は研究者を夢見ていたものの卒業後は都市銀行へ。融資や国際広報の仕事をしていましたが、家の事情で家業の(株)大塚家具に入社。経営企画から財務、広報、IR、危機管理、教育研修、商品開発までなんでもやり、10年で退職。その後、広報・IRのコンサルタントを本業としながら、夜間の法科大学院に通い、大学との共同研究による住宅履歴情報管理システム開発のLLPに参画するなど、自由な活動を楽しんでいましたが、なぜか、昨年からまた家業の経営に携わることに。先がどうなるのか分からないのが人生ですが、どう生きるかは自分で決められます。転機にあたって役に立ったもの、人との出会い、ワークライフバランス、そして現在の仕事のことも少し、お話しできればと思います。

第4回 5月18日(火)



テーマ：「日本のポジショニング／新時代が求める人材」

講師：網屋信介 法学部・昭和56(1981)年卒
衆議院議員
財務金融委員、決算行政監視委員

講義内容

今、世界も日本も、大きな社会構造の転換期を迎えています。産業構造、人口構造そしてポスト冷戦の東西構造。そういった中、日本はどうそのポジショニングを行うべきか。また、少子高齢化が急激に進む中での成長戦略はいかにあるべきか。こういった課題に対して、民主党の考え方、私自身の考え方をお話したいと思います。また、長年外資系投資銀行で学生や銀行員、証券マンをリクルートしてきた経験を踏まえ、就職を控えた学生の皆さんに、新しい時代における必要とされる人材像についてお話したいと思います。

第5回 5月25日(火)



テーマ：「外資系金融機関における資産運用業務～リスクテイクという職業」

講師：久宗利規 商学部・昭和63(1988)年卒
ウエリントン・インターナショナル・マネジメント・カンパニー
債券運用部 グローバル債券 ポートフォリオマネジャー

講義内容

皆さんは、金融業界における資産運用業務(Asset Management)というものにどのようなイメージをお持ちでしょうか？私は日本経済がまだバブル真っ盛りの1988年に米系金融機関に入社して以来、金融市場部門で資産運用業務に携わっています。この間、激動する金融業界とともに、通貨・債券・金利スワップのトレーダー及びポートフォリオマネジャーとして転職を重ねてきました。なぜ金融業界を選んだのか？なぜ外資に新卒で入社したのか？転職・キャリア形成では何を重視したのか？講義では、資産運用業界の現状や今後の展望にも触れながら、これまでの私自身の運用業務の経験を具体的にお話することで、是非皆さんのお役に立ちたいと考えております。

第6回 6月1日(火)



テーマ：「世界を見よう、そして、『仕事』をしよう」

講師：石井 隆 法学部・平成2(1990)年卒
司法研修所検察教官(検事)

講義内容

学生時代から社会人として腰が落ち着くまで、ただただ、「いつか世界で羽ばたきたい」という漠然とした野望を抱いていました。なのに、なぜか司法界に進み、司法試験合格後、南米などでバックパッカーをしたり、検事任官後は、米国留学や、ブリュッセルに外交官として駐在など、検事には珍しく海外での経験に恵まれました。南米を貧乏旅行中、故小田実さんの「何でも見てやろう」(講談社)を読み、「放浪をしているだけでは腐ってしまう。自分は日本で自分の責任を果たそう」と思うに至りました。それが、私にとっては検事として仕事をするのでした。現在、司法修習生に指導する教官をしています。かつて何を考えて職業を選んだか、現在、変わりゆく司法の世界の中で、どんなことを考え、何に悩みながら日々の仕事をしているのかについて話したいと思います。

第7回 6月8日(火)



テーマ：「普通のサラリーマンは今後食べていけるのか？」

講師：澤木信宏 経済学部・平成4(1992)年卒

三菱重工業株式会社 輸出課 課長代理

講義内容

学生時代は、勉学、アルバイト等をして深く社会と関わることもなく、問題意識も持たずに過ごしてきた私。職業選択も、就職活動をしていた当時は真剣に考えていたつもりでも、今思えばそれほど明確なポリシーがあった訳ではなく、結果的には普通にサラリーマンを選択し、社会人となった後も大きな決断もせずに過ごしてきた。そんな私でもこれまで何とか好きな海外の仕事を中心にやってこられたが、昨今の外部環境の変化はそんな普通のサラリーマンが会社人生を全うすることを許してくれない。自省の念も込めて、実際の仕事の現場で感じる課題と、今後の目指すべきサラリーマン像、そこから考えて学生時代にやっておいた方が良かったなどと思われることを話したい。大丈夫か「オレ」？そして「君達」？

第8回 6月15日(火)



テーマ：「変化する社会で働く心構え」

講師：小山絢子 社会学部・平成16(2004)年卒

三井物産株式会社 人事総務部人材開発室

講義内容

「君たちの多くはこれまでは決められたルールの上を走ってきただろう。そのことに気づいているだろうか」。一橋大学に入学し、最初の授業でこう問われ、ドキッとした記憶があります。それと同時に、これから先の将来は自分次第でいろんな道が拓けるんだと、今度はドキドキしたのを覚えています。それ以来、様々な場所へ行き、様々な人と出会い、未知の世界に挑むことに楽しみを覚え、大学卒業後は総合商社に就職しました。

総合商社は時代の大きな変化のたびに、「商社不要論」、「商社冬の時代」などと言われ続けてきましたが、それでも今総合商社が存在するのは、変化に応じて自らを進化させ、またそこで働く一人ひとりの社員が常に挑戦をし続けてきたからです。これからは変化するのが当たり前の中と言われますが、そんな社会において道を切り拓いていくにはどのような力が必要とされるのでしょうか。毎日変化の中で奮闘する私自身の経験や考えをお話ししながら、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

第9回 6月22日(火)



テーマ：「温暖化対策—日本の役割」

講師：澤 昭裕 経済学部・昭和56(1981)年卒

21世紀政策研究所 研究主幹

三澤株式会社 代表取締役会長

講義内容

地球温暖化問題は、単なる環境問題ではなく、経済問題・エネルギー問題である。また国際交渉は、各国産業の国際競争力に直結し、国民負担に直接影響することから、熾烈を極める。「温暖化しない地球」は公共財であり、その供給費用負担分担問題の解決は難しく、現状では京都議定書という大きな欠陥を抱える国際枠組みしか存在していない。昨年のCOP15ではコペンハーゲン合意が成立したが完全なものではない。一方、国内的には1990年▲25%温室効果ガス削減目標の達成のために、国内排出量取引制度・環境税の導入などが議論されている。今回の講義では、講師の行政経験や政策提言活動を踏まえ、地球温暖化問題の基本的な見方や交渉の流れを解説しながら、日本の政治、外交、行政の仕組みについても見ていくことにする。

第10回 6月29日(火)



テーマ：「ジャーナリズムと民主主義」

講師：杉田弘毅 法学部・昭和55(1980)年卒
共同通信社編集委員室編集長

講義内容

20年以上、世界各地から国際報道を続けてきた経験から思うことは、民主主義社会の育成や世界の平和維持のために、健全なジャーナリズムが必要であるということだ。歴史を見れば、新聞やテレビが良質の報道を行った時に、民主主義が育ち平和が実現してきた。これはウェブサイトやブログなど興隆する新メディア媒体においても、あてはまる原則だろう。一方で、ジャーナリズムにはその商業主義が持つ、世論におもねることでナショナリズムを助長するという悪弊がある。講義では良質なジャーナリズムを育てるために、ジャーナリストや読者は何をすべきかを考えたい。同時に、ビジネスモデルとして破たんしつつある、伝統的なメディア媒体の現状を検討し、ジャーナリズムの明日の姿を探る。

第11回 7月6日(火)



テーマ：「M & A に浸る人生」

講師：岡 俊子 社会学部・昭和61(1986)年卒
アビーム M & A コンサルティング株式会社
代表取締役社長

講義内容

私が一橋大学を卒業した1980年代後半は、わが国のM & A業界はまだ黎明期にあり、「将来M & Aの仕事に従事する」など考えてもいませんでした。ましてやコンサルティング会社にこんなに長い期間務めることになるなど全く想像できていませんでした。

それが今では、M & Aとコンサルティングにどっぷりと浸る日々です。私はM & Aの仕事が好きです。M & Aが醸し出すダイナミズムと、多くの人たちがありとあらゆる事態を想定した上で究極の意思決定を下すプロセスに大きな魅力を感じます。

クライアントがM & Aを通して企業価値をあげることができるように支援することが私たちの役割です。講義では、社会人になってからいくつかの転機を経てM & A業務を行うことになったのですが、M & A業務に取り組むようになった経緯、その際に考えたことを中心にお話します。

第12回 7月13日(火)



テーマ：「人は何故バブルに騙されるのか」

講師：岡田 昌徳 経済学部 昭和45(1970)年卒
日鉱金属株式会社 代表取締役社長

講義内容

16世紀のオランダのチューリップのバブルに始まり、最近の日本のバブル崩壊に至るまで、人間は世界中で繰返しバブルを作り出し、バブルは多くの人々の人生を狂わせてきた。私の卒論のテーマは「ガルブレイス」論であった。彼の著「バブルの物語」を中心に、バブルは何故発生するのか、そして人間は歴史を学んでいるはずなのに、それをバブルだと何故信じないのか。これから社会に出て行く若い人達に、バブルに実際何回か翻弄させてきた私の実体験を踏まえ、「皆さんがバブルに決して騙されぬように」と自省を込めてお話ししたいと思う。